

馬場馬術の目的と一般原則（※パラ関連を除く）

2022.11.21 FEI 発行

1. 馬場馬術の目的は調和のとれた調教によって馬を幸あるアスリートに育て上げることにある。その結果として、馬は穏やかで柔軟性を示し、のびのびとフレキシブルな動きを見せるばかりでなく、自信をもち、注意深く敏捷となって選手との相互理解が完璧な域にまで達するのである。

このような資質は次のような動きで表現される：

- ペースを自由自在に変じ、かつ整正であること
- 調和がとれていて軽快であり、かつ容易な動きであること
- 旺盛なインパルジョンから生み出される前駆の軽快な振り出しと後駆のエンゲイジメント
- いかなる緊張や抵抗も見せず、従順性／透過性 (Durchlässigkeit) をもって銜を受け入れていること

2. これによって、あたかも馬自身が自分の意志で要求された運動を行っているような印象を与えるのである。馬は注意深くかつ自信に満ち、おおらかに選手の指示に従って直線上ではどのような運動でも馬体を完全に真直ぐにし、曲線上を進む時には馬体をそのカーブに一致させるようバンドさせる。

3. 常歩は整正かつ自由でのびのびとしたもの。速歩は自由で、関節をよく屈伸させて、整正で闊達な歩き。駢歩は運歩にまとまりがあり、軽快で均衡のとれたもの。後駆の動きは決して不活発であったり、緩慢ではない。馬は選手の極めてわずかな扶助に反応して、馬体の隅々まで生氣と活力を行き渡らせた動きをする。

4. いかなる抵抗もなく、旺盛なインパルジョンと諸関節の良好な屈伸が生まれてくると、馬は色々な扶助に躊躇することなく自ら進んで従い、沈着かつ正確に反応し、天性のものと調教の積み重ねによる心身の調和を醸し出す。

5. 停止の時を含めて馬はいかなる運動中でも「オン・ザ・ビット」の体勢でなければならない。調教の進度に応じて、また歩幅の伸長やコレクションの度合いに応じて、馬がいくぶん頭頸を起揚させてアーチを描き、終始軽くソフトなコンタクトで従順に銜を受け入れている状態を「オン・ザ・ビット」と言う。頭は一定の位置に保たれ、原則として鼻面は僅かに垂直線よりも前に出ており、項は頸の最も高い位置にあって屈撓し、選手の要求にいかなる反抗もない。

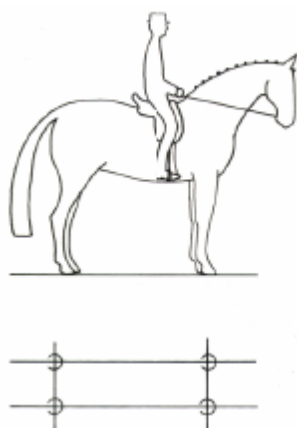
6. ケイダンスは速歩と駢歩において現れるものであり、非常に顕著な整正さと旺盛なインパルジョン、バランスをもって馬が動いている時に示す正しい調和の結果である。ケイダンスは速歩や駢歩で行ういかなる運動においても、また速歩や駢歩のどのような歩度でも維持されなければならない。

7. ペースの整正さは馬場馬術の必須条件である。

8. 地点での運動課目の実施。競技場内の決められた地点で行わなければならない運動は、馬が地点に対して斜めまたは直角に近づく移行を除き、選手の身体がその地点上にある瞬間に行わなければならない。この場合、移行時に馬がまっすぐになるように、馬の鼻が軌跡の地点に到達したときに移行が行わなければならない。これには踏歩変換も含まれる。

● 停止

1. 停止において馬は注意深く、後躯をエンゲイジメントさせて不動かつ真直ぐに立ち、体重は四肢に均等にかけていなければならない。頸は起揚して項が最も高い位置にあり、鼻梁は垂直線上よりもわずかに前に出ているべきである。馬は「オン・ザ・ビット」の状態、選手の拳と軽くソフトなコンタクトを保ちつつ静かにチューイングし、選手のわずかな扶助で直ちに運動を開始できる体勢にななければならない。停止は3秒以上示さなければならない。敬礼を行っている間は停止を示すものとする。
2. 停止とは、選手がシートと脚の扶助を適宜強め、柔らかく握った拳に向かって馬を押し出すことによって馬体重を後躯に移動させ、速やかではあるが急停止ではない定位置での停止へと導くことによって得られるものである。停止は一連のハーフホルト（「移行」の項目を参照）で準備を行う。
3. 停止前後のペースのクオリティは採点に欠かせない要素である。



● 常歩

1. 常歩とはマーチングペースであり、馬の四肢は一枝ずつ等間隔で「4回」踏歩する。馬体全体に緊張がまったくなく整正さが、常歩で行うすべての運動において維持されなければならない。
2. 同側の前肢と後肢がほとんど同時に動いている時には、常歩が側対になりかけていると言えよう。この側対歩様のような不整な歩きは著しくペースを損なうものである。

3. 常歩には**収縮常歩**、**中間常歩**、**伸長常歩**および**自由常歩**がある。オーバートラッキングの程度や体勢の違いによって、このような常歩を明確に区別して示すべきである。

・**収縮常歩**

馬は「オン・ザ・ビット」であり、頸を起揚させてアーチを描き、明らかなセルフキャリッジを見せて前進する。鼻梁は垂直に近づき、選手の拳と馬の口との軽いコンタクトが維持されている。後肢は飛節の力強い動きを伴ってエンゲイジメントする。ペースは前進氣勢があり活発で、四肢は正しい順序で踏歩する。すべての関節が一層顕著に屈曲するため、歩幅は中間常歩よりも狭くなるが、肢は一段と高く上がるようになる。収縮常歩は一段と力強い歩きを示すものであるが、歩幅は中間常歩よりも狭くなる。

・**中間常歩**

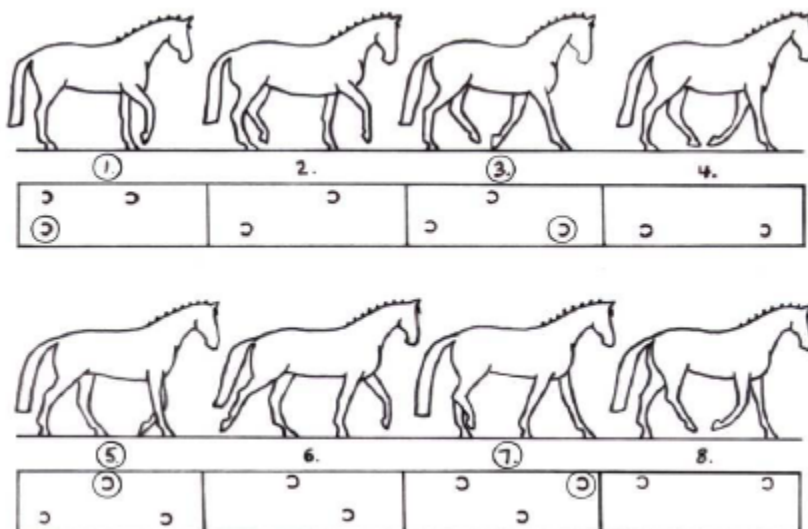
明瞭で整正、かつ堅苦しさをない中等度に伸展させた常歩である。馬は「オン・ザ・ビット」であり、活力に富むも、ゆったりとした均等かつしっかりした常歩で進み、後肢は前肢の着地点よりも前に踏み込む。選手は馬の頭頸の自然な動きを許しつつも、馬の口と軽くソフトで静定したコンタクトを保つ。

・**伸長常歩**

馬は性急になることなく、また歩きの整正さを損なわずに、できる限り歩幅を伸ばした動きを見せる。後肢は明瞭に前肢の着地点よりも前に踏み込む。選手が馬の口とのコンタクトや項のコントロールを失うことなく、馬に頭頸を（前下方に）ストレッチアウトさせる。鼻梁は明らかに垂直線よりも前になければならない。

・**自由常歩**

自由常歩はリラクゼーションのある、頭頸をストレッチアウトさせた、完全な自由を与えられたペースである。後肢が前肢の着地点よりも明瞭に前へ踏み込むグラウンドカバーとストライドの伸展は、自由常歩のクオリティには必須である。



常歩は4ビートのリズムで8段階に分かれたペースである。

<丸で囲んだ番号はビートを示す>

4. 手綱を伸ばした状態でのストレッチ

この訓練により馬の「透過性 (Durchlässigkeit)」が明瞭に印象づけられ、バランスやサブルネス、従順性、リラクゼーションが示される。この「手綱を伸ばした状態でのストレッチ」運動を正しく実施するためには、馬が頭頸を前下方へ徐々に伸ばすのにあわせて選手は手綱を伸ばす。頸を前下方へ伸展させるにつれ、馬の口はおおむね肩と水平のライン上にまで至るものとする。選手の拳とは弾性のある一定したコンタクトを保たなければならない。リズムを保ったペースでなければならず、馬は後躯を十分にエンゲイジメントさせ、肩は軽い状態であること。再び手綱をとる間、馬は口や頂で抵抗することなくコンタクトを受け入れなければならない。

● 速歩

1. 速歩とは、空中にある一瞬時に区切られた両斜対肢（左前肢と右後肢、および右前肢と左後肢）による「2ビート」のペースである。
2. 速歩では常に伸びやかで活力に満ちた整正な歩きで、躊躇することなく進まなければならない。
3. 速歩のクオリティは全般的な印象、即ち収縮歩度であっても伸長歩度であっても、歩きの整正さとエラスティシティー、ケイダンス、インパルジョンにより審査される。このクオリティは柔軟な背中と十分にエンゲイジメントさせた後躯に起因し、またどのような歩度の速歩でも同じリズムと自然なバランスを維持できる能力によって生まれるものである。
4. 速歩には**収縮速歩**、**尋常速歩**、**中間速歩**、**歩幅の伸展**、および**伸長速歩**がある。

・ 収縮速歩

馬は「オン・ザ・ビット」の状態にあり、頸を起揚させてアーチを描いて前進する。飛節は屈伸して十分なエンゲイジメントを示し、活力に富んだインパルジョンを維持しなければならない。これによって両肩を一層自在に動かせるようになり、完全なセルフキャリッジが具現される。他の速歩歩度に比べて馬の歩幅は狭くなるが、エラスティシティーとケイダンスが減ることはない。

・ 尋常速歩

これは収縮速歩と中間速歩との間であり、馬の調教が十分に進んでおらず、収縮運動のできる段階に至っていない場合のペースである。適切なバランスを示して「オン・ザ・ビット」の状態にある馬は、左右均等でエラスティックなステップと飛節の良好な動きをもって前進する。「飛節の良好な動き」という表現は、後躯の闊達な動きがもたらすインパルジョンの重要性を強調するものである。

・ 中間速歩

中間速歩とは、伸長速歩に比べて中程度の伸展を見せるペースであるが、伸長速歩よりも「丸み」がある。急ぐことなく馬は明確に歩幅を伸ばし、後躯からのインパルジョンを受けて前進する。馬は収縮速歩や尋常速歩の時よりも頭を垂直よりもう少し前へ出し、頭頸を僅かに下げることが許される。歩きは均等であり、全体の動きはバランスがとれ、のびのびとしたものであるべきである。

・歩幅の伸展

4歳馬用の課目では「歩幅の伸展」が求められる。これは尋常速歩と中間速歩の間の歩度であり、中間速歩を行うには馬の調教が十分に進んでいない段階のものである。

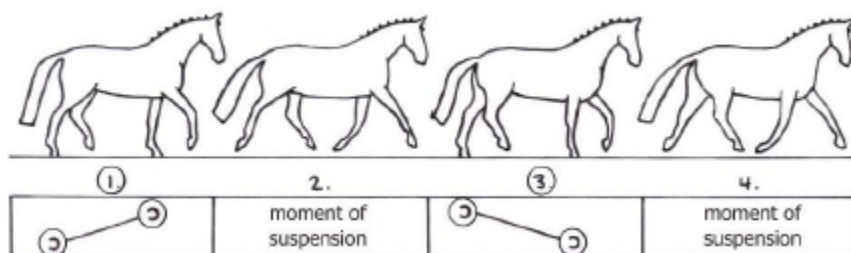
・伸長速歩

馬はできる限りのグラウンドカバーを見せる。急ぐことなく、馬は後躯からの力強いインパルジョンを受けて歩幅を最大限に伸ばす。選手は馬が項の位置を一定に保ちながらもフレームを伸展させ、地面をしっかりとらえて前進することを許す。前肢は進行方向の延長線上に着地しなければならない。前肢と後肢の動きは、伸長させた時に等しく前へ振り出すべきである。馬の動き全体が十分にバランスのとれたもので、収縮速歩への移行は後躯へ一層体重をかけることでスムーズに行われるべきである。

5. すべての速歩運動は、競技課目で特に指定がない限り軽速歩をとらない。

6. 手綱を伸ばした状態でのストレッチ

この練習は馬の「透過性」を明確に印象づけるものであり、バランスとサプルネス、従順性、リラクゼーションを証明するものである。「手綱を伸ばした状態でのストレッチ」練習を正しく実施するには、馬が徐々に前下方に頭頸を伸展させるのに合わせて選手は手綱を伸ばさなければならない。馬の頸が前下方へ伸展するにつれ、その口はおおむね肩を通る水平線上に至る。選手の拳とはしなやかで一定したコンタクトを維持しなければならない。ペースはそのリズムを維持し、馬は後肢をよく踏み込ませて肩は軽い状態であるものとする。手綱を再びとる間、馬は口や項で反抗することなくコンタクトを受け入れなければならない。



速歩は2ビートのリズムで4段階に分かれたペースである。

<丸で囲んだ番号はビートを示す>

● 駢歩

1. 駢歩は「3ビート」の歩法であって、例えば右手前駢歩の場合は左後肢、左斜対肢（左前肢と右後肢が同時）、右前肢の順で踏歩し、その後に四肢が一瞬空中に浮いてから次のストライドが始まる。
2. 駢歩は常に軽快でケイダンスがあり、整正なストライドで躊躇することなく前進するべきものである。
3. 駢歩のクオリティは全般的な印象、即ち柔軟な項を維持して銜を受け、活発な飛節の動きを伴った後躯のエンゲイジメントに起因するペースの整正さと軽快さ、そしてアップヒル傾向とケイダ

ンスによって審査されるとともに、駢歩の中での移行でも同じリズムとナチュラルバランスを維持する能力によって判断される。

4. 駢歩には**収縮駢歩**、**尋常駢歩**、**中間駢歩**、**歩幅の伸展**、および**伸長駢歩**がある。

・収縮駢歩

馬は「オン・ザ・ビット」の状態にあり、頸を起揚させてアーチを描く。飛節は十分にエンゲイジメントして活かに富んだインパルジョンを保ち、これによって両肩は一層自在に動かせるようになり、セルフキャリッジとアップヒル傾向を発揮することとなる。馬の歩幅は他の駢歩歩度に比べて狭くなるが、エラスティシティーとケイダンスを失うことはない。

・尋常駢歩

これは収縮駢歩と中間駢歩との間のペースであり、馬の調教が十分に進んでおらず、収縮運動のできる段階に至っていないものである。馬は「オン・ザ・ビット」の状態でありながら自然なバランスのとれた動きを示し、左右均等で軽快、かつ闊達なストライドと良好な飛節の動きを伴って前進する。「良好な飛節の動き」という表現は、後躯の闊達な動きがもたらすインパルジョンの重要性を強調するものである。

・中間駢歩

これは尋常駢歩と伸長駢歩との間のペースである。急ぐことなく、馬は後躯からのインパルジョンを受けて明瞭に歩幅を伸ばし、前進する。馬は収縮駢歩や尋常駢歩の時よりも頭を垂直よりもう少し前へ出し、頭頸を僅かに下げることが許される。ストライドはバランスがとれ、のびのびとしたものであるべきである。

・歩幅の伸展

4歳馬用の課目では「歩幅の伸展」が求められる。これは尋常駢歩と中間駢歩の間のペースであり、中間駢歩を行うには馬の調教が十分に進んでいない段階のものである。

・伸長駢歩

馬はできる限りのグラウンドカバーを見せる。急ぐことなく、歩幅を最大限に伸ばす。後躯からの力強いインパルジョンを受けて、馬は落ち着きがあり軽快でストレイトネスを保つ。選手は馬の項を一定に保ちながらもフレームを伸展させて地面をしっかりと捉えて前進することを許す。馬の動き全体が十分にバランスのとれたもので、収縮駢歩への移行は後躯へ一層体重をかけることでスムーズに行われるべきである。

中間駢歩からの移行、および伸長駢歩から収縮駢歩への移行では、ケイダンスを維持していなければならない。

・反対駢歩

反対駢歩は、コレクションにて行われるべきバランスとストレイトネスが求められる運動である。外方前肢がリードし、このリードする側に姿勢をとりつつ正しい踏歩順序で駢歩を行う。（同側の）前肢と後肢は同一蹄跡上を踏歩するものとする。

・駢歩でのシンプルチェンジ

これは駢歩から速歩などを入れずに常歩へ移行し、3～5歩の明確な常歩を入れて、直ちに逆の手前の駢歩へ移行する運動項目である。

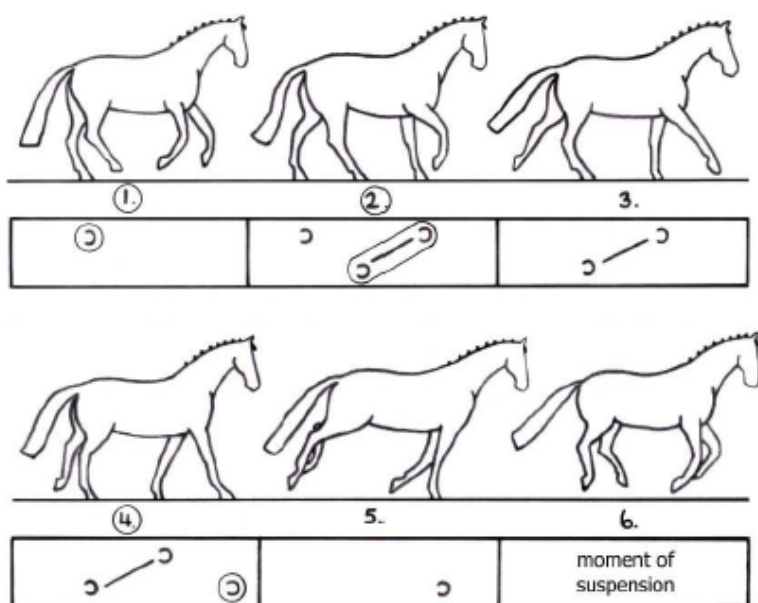
・踏歩変換（フライングチェンジ）

踏歩変換は、踏歩の入れ替えを1ストライドの中で前肢と後肢同時に行うものである。リードする側の前肢および後肢の入れ替えは空中に浮揚している間に行われる。扶助は的確で目立たないものであるべきである。

踏歩変換はまた4歩毎、3歩毎、2歩毎、あるいは歩毎といった連続で行うことも可能である。連続踏歩変換においても馬は活発なインパルジョンをもって軽快、沈静かつ真直であり、一連の動きを通して同じリズムとバランスを維持する。連続踏歩変換ではその軽快さと流れ、およびグラウンドカバーを制限したり止めたりしないよう、十分なインパルジョンを維持しなければならない。

踏歩変換の目的：踏歩変換の扶助に対する馬の反応、敏感さと従順性を示すことにある。

駈歩は3ビートのリズムで6段階に分かれたペースである。



● 後退

1. 後退は2ビートで斜対肢を後方へ移動させる動きであるが、空中へ浮揚する瞬間はない。一对の斜対肢がもう一对の斜対肢と交互に上げ下ろしを行い、前肢は後肢と同じ蹄跡上を歩く。
2. 後退を行う間、馬は前方へ進む意欲を維持しながらも「オン・ザ・ビット」の状態にあるべきである。
3. 次の動作を予期した動きや慌しい動き、選手のコンタクトへの反抗や回避、後躯が直線上から逸脱すること、後肢が開いてしまったり、動きが緩慢になること、前肢をひきずることは重大な過失である。
4. 歩数は前肢が後ろへ移動するごとに数える。所定の歩数の後退を終えた後、馬は四肢を揃えた停止を示すか、あるいは要求されたペースで直ちに前進するべきである。一馬身の後退が求められている課目では、3歩か4歩で行うものとする。

5. シリーズで行う後退（Schaukel 後退－前進－後退）は、2回の後退の間に常歩を入れたものである。移行では流れを損なわず、要求された歩数で行う。

● 移行

ペースの変換や同一ペース内での歩度の変換は、指定標記地点で正確に行われるべきものである。ケイダンス（常歩以外において）は、ペースや運動が変わる時点、あるいは馬が停止する時まで維持されるべきものである。同一ペース内での移行では、その移行の間を通して同じリズムとケイダンスを維持しつつ、明瞭にその違いを示さなければならない。馬は選手の拳に対して軽く、沈静で正しい姿勢を保たなければならない。

同じことが一つの運動から他の運動への移行、例えばパッサージュからピアップエ、あるいはその反対の場合についても言える。

● ハーフホルト

いかなる運動あるいは移行であっても、目には見えないほどのハーフホルトで準備を行うべきものである。ハーフホルトとはシートと脚、選手の拳がほぼ同時に協調した作用であり、運動の実施、あるいは下位のペースまたは上位のペースへ移行する前に馬の注意を喚起し、バランスを改善する目的がある。もう少し体重を馬の後躯へ移すことによって、後肢のエンゲイジメントと後躯のバランスが改善され、全体として前躯の軽快さと馬のバランスに資することとなる。

● 方向変換

1. 方向変換では、描くべき線に沿って馬はその体をバンドさせ、いかなる反抗も示さず、あるいはペースやリズム、速度を変えることなくサプルであり、選手の指示に従うものとする。

2. 方向変換は以下の方法で行うことができる：

- a. 隅角通過を含めて直角に回転すること（直径約6mの巻乗りの1/4）
- b. 短斜線と長斜線の使用
- c. 手前変換を伴う半巻乗りと半輪乗り
- d. ハーフピルーエットとターン・オン・ザ・ホンチズ
- e. 蛇乗り
- f. （ジグザグでの）往復手前変換*

馬は方向変換の前に一瞬、真直ぐになるべきである。

*ジグザグ：方向変換を伴う3回以上のハーフパスを入れた運動

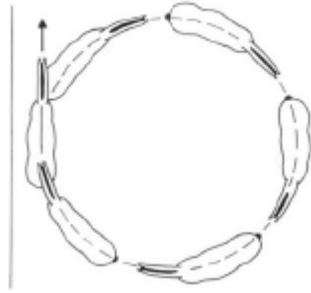
● 図形

馬場馬術課目で使われる図形とは巻乗り、蛇乗り、8字乗りである。

長蹄跡、または中央線の両側に1個、2個または3個のループを描く図形をシャローループという。直線に直角（90°）に交わらなければならない蛇乗りと違い、シャローループは直線に対して斜めに入る／出る。

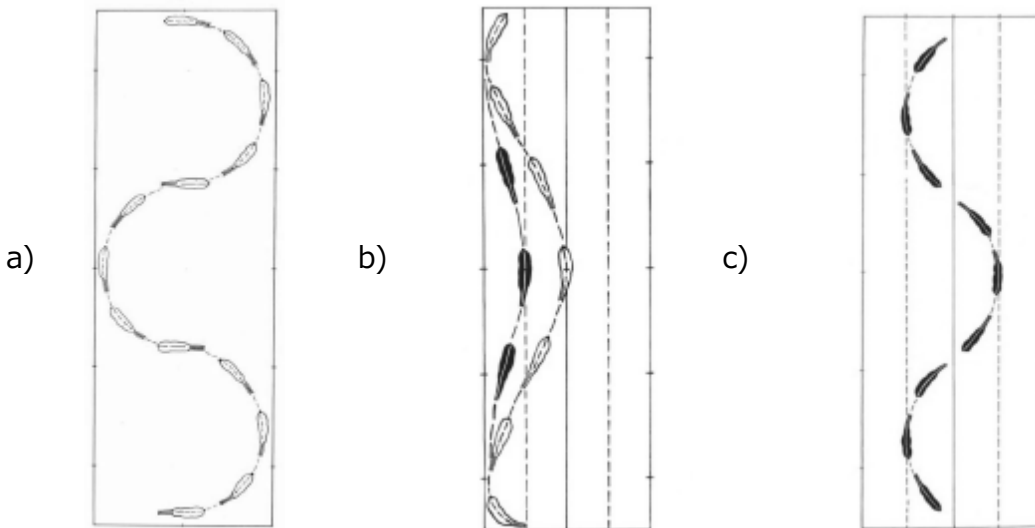
1. 巻乗り

巻乗りとは直径6m、8m、10mの円である。直径が10mを超えるものは輪乗りである。



2. 蛇乗り

蛇乗りのループがアリーナの長蹄跡に接しているものは、複数の半輪乗りを直線で繋いだものと言える。中央線を横切る時に馬は短蹄跡に平行となる(a)。半輪乗りの大きさによって直線での繋ぎの長さが変わる。ループの片側だけがアリーナの長蹄跡に接する蛇乗りは、蹄跡から5mもしくは10mの範囲で行われる(b)。中央線を中心とする蛇乗りは1/4ラインの間で行われる(c)。



3. 8字乗り

この図形は、課目で指定された同等の大きさの巻乗りか輪乗りを2個、8の字を描くように中央で繋いだものである。選手は図形の中央で方向転換をする前に一瞬、馬体を真直ぐにする。



● 2蹄跡運動

1. 以下に示す運動は明確に区別して行わなければならない：レッグイールディング、ショルダーイン、肩を内へ、腰を内へ、ハーフパス。
2. 2蹄跡運動の目的とは：
 - 2.1. 選手の扶助に対する馬の従順さを向上させる；
 - 2.2. 馬のすべての部分を柔軟にすることで、肩の自在性と後躯のサプルネスを高め、口、項、頸、背中、腰のつながりのエラスティシティーを高める；
 - 2.3. ケイダンスを向上させ、バランスとペースを調和させる。

● レッグイールディング

1. レッグイールディングの目的：馬のサプルネスと側方への反応を実証するため。
2. FEI競技においてレッグイールディングは尋常速歩で行われる。馬は、項の部分で進行方向とは反対側の内方へ幾分フレクションすることを除けば、ほぼ真直であり、選手からは内側の睫毛と鼻孔が僅かに見える程度である。馬の内方肢は外方肢の前を交叉する。
レッグイールディングは収縮運動の準備段階における馬のトレーニングに取り入れられるべきである。後に、より進歩した「肩を内へ」の運動と相伴って、馬を柔軟で、堅苦しさをなくのびのびとさせ、ペースを自由自在に変じ伸縮性がありかつ整正で、軽快で無理がない運動のための最良の方法である。
レッグイールディングは「斜線上」で行うことができるが、その場合は馬の前躯が僅かに後躯より先行していなければならないものの、馬体はできる限りアリーナの長蹄跡に平行であるべきである。これは「壁に沿って」行うこともでき、この場合は馬体が進行方向に向かって約35度の角度となるものとする。

● 側方運動

1. 側方運動の主な目的は、レッグイールディングを除き、後躯のエンゲイジメントを改善してこれを高め、その結果として収縮度を高めることである。
2. すべての側方運動、即ち「肩を内へ」「腰を内へ」「腰を外へ」「ハーフパス」では、馬は僅かにベンドし、異なる蹄跡上を進む。
3. 運動のリズムや流れ、バランスを阻害しないよう、ベンドあるいは顎のフレクションを強く求め過ぎてはならない。
4. 側方運動では常に伸びやかで整正なペースを保ち、絶えずインパルジョン（推進力）を維持しつつも関節のサプルネスとケイダンスを維持し、バランスの取れた動きを示さなければならない。選手が馬体をベンドさせることと側方へ動かすことに気を取られるために、インパルジョンが失われてしまうことが多い。

・肩を内へ

「肩を内へ」は収縮速歩で行われる。馬は選手の内方脚を軸として僅かではあるが一様にバンドし、約30度の一定な角度にてエンゲイジメントとケイダンスを維持する。馬の内方前肢は外方前肢の前を交叉して進み、内方後肢は内方腰部を低下させつつ馬体下へ踏み込んで外方前肢と同じ蹄跡を踏歩する。馬は進行方向と反対側へバンドする。

・腰を内へ

「腰を内へ」は収縮速歩あるいは収縮駢歩で行われる。馬は選手の内方脚を軸として僅かにバンドするが、その度合いは「肩を内へ」よりも深い。約35度の一定な角度を示す（正面あるいは背後から見て四蹄跡となっている）。前躯は蹄跡上にあり、後躯が内側へ入る。馬の外方肢は内方肢の前を交叉する。馬は進行方向へバンドする。

「腰を内へ」に入るには、後躯が蹄跡から離れるか、あるいは隅角通過か輪乗りを行った後に蹄跡へ戻らないものとする。「腰を内へ」の終わりでは輪乗りを終える場合と同様に（項や頸が反対側に曲がってしまうことなく）後躯が蹄跡へ戻る。

「腰を内へ」の目的：一直線上での流暢な収縮速歩運動と正しいバンドを見せること。前肢および後肢は交叉し、バランスとケイダンスが維持されている。

・腰を外へ

「腰を外へ」は「腰を内へ」とは逆の運動である。前躯が内側へ入るかわりに、後躯は蹄跡上に残る。「腰を外へ」を終えるには、前躯を蹄跡上で後躯に揃える。その他の点では「腰を内へ」で適用した原理と条件が適用できる。

馬は選手の内方脚を軸として僅かにバンドする。馬の外方肢は内方肢の前を交叉する。馬は進行方向へバンドする。

「腰を外へ」の目的：「肩を内へ」よりも深いバンドの角度をもって一直線上で流暢な収縮速歩運動を示すこと。前肢および後肢は交叉し、バランスとケイダンスが維持される。

・ハーフパス

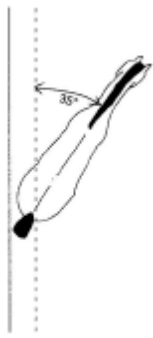
ハーフパスは「腰を内へ」の変形であり、壁に沿ってではなく斜線上で行う。これは収縮速歩（および自由演技のパスサーージュ）、あるいは収縮駢歩で行うことができる。馬は進行方向に向かい選手の内方脚を軸にして僅かに体をバンドするべきである。馬はこの運動全体を通じて同じケイダンスとバランスを維持するべきである。肩の可動性を高めて一層自由な動きを求めるには、インパルジョンを維持し、特に内方後肢のエンゲイジメントを高めることが大変重要である。馬体はアリーナの長蹄跡にほぼ平行であり、前躯は僅かに後躯に先行する。

速歩では外方後肢が内方肢の前を交叉する。駢歩にてこの運動は前方／側方への一連のストライドで行われる。

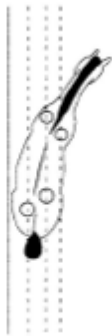
速歩ハーフパスの目的：「肩を内へ」よりも深いバンドの角度をもって斜線上で流暢な収縮速歩運動を示すこと。前肢および後肢は交叉し、バランスとケイダンスが維持される。

駢歩ハーフパスの目的：リズム、バランスあるいはバンドの柔らかさや従順性を何ら失うことなく、流暢に前方および側方に動くことで、駢歩のコレクションとサブルネスを示して発達させること。

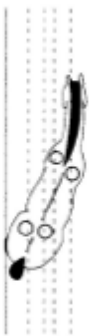
壁に沿ってのレッグイーディング



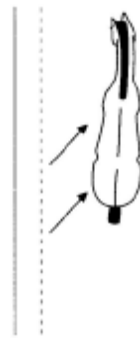
肩を内へ



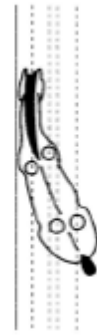
腰を外へ



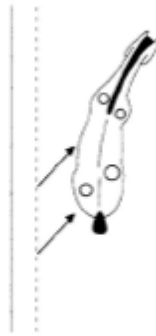
斜線上でのレッグイーディング



腰を内へ



ハーフパス



● ピルーエット、ハーフピルーエット、ターン・オン・ザ・ホンチズ

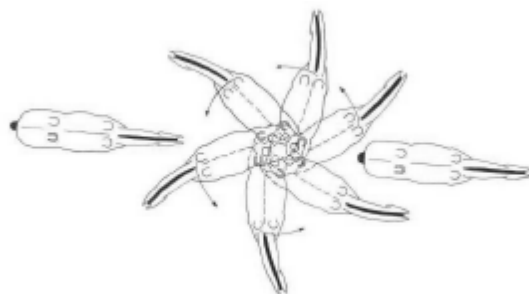
1. ピルーエット（ハーフピルーエット）は、馬体の長さと同じ半径で二蹄跡で行われる360度（180度）の旋回であり、前軀は後軀の周りを旋回する。
2. ピルーエット（ハーフピルーエット）は、通常、収縮常歩か収縮駢歩で行われるが、ピアッフェで行うことも可能である。
3. ピルーエット（ハーフピルーエット）では、前肢と外方後肢は、軸となる内方後肢の周りを旋回するもので、内方後肢はできる限り小さな円を描く。
4. いかなるペースのピルーエット（ハーフピルーエット）を行う場合でも、馬は旋回する側に僅かにベンドし、軽いコンタクトにより「オン・ザ・ビット」の状態、当該ペースでの正しい肢の

運びとタイミングを維持しながらスムーズに旋回するべきである。この運動中、項は最も高い位置に維持される。

5. ピルーエット（ハーフピルーエット）を行っている間、馬は闊達さ（常歩も含む）を維持しており、僅かでも決して後退、あるいは横にずれることがあってはならない。

6. 駢歩ピルーエットあるいはハーフピルーエットを行う場合、選手は一層のコレクションを求めながら馬の軽快さを維持するべきである。後躯は十分にエンゲイジメントして沈下し、関節は十分な屈伸を示している。この運動の重要な点は、ピルーエットを行う前と後の駢歩ストライドのクオリティである。ピルーエットに入る前には闊達さと、コレクションの度合いを増す必要があり、ピルーエットを終える時点ではバランスを維持しなければならない。

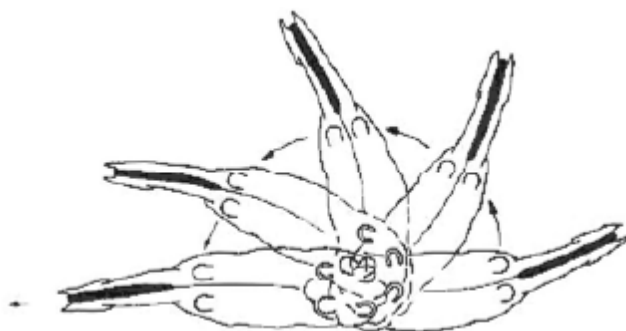
駢歩ピルーエットと駢歩ハーフピルーエットの目的：内方後肢を軸にして小さな半径で旋回し、活発さと明瞭な駢歩を維持しつつ旋回方向へ僅かにベンドし、図形の前後でのストレイトネスとバランスを保ち、明確な駢歩のストライドで旋回する馬の意欲を示すこと。駢歩でのピルーエットまたはハーフピルーエットにおいて、斜対肢－内方後肢と外方前肢－が同時には地面につかないであろうが、審判員は真の駢歩ストライドが認識できるべきである。



駢歩でのピルーエットとハーフピルーエット

7. ピルーエット（ハーフピルーエット）のクオリティは、サプルネス、軽快さ、整正、そして正確さと、始まりと終わりのスムーズさによって審査される。駢歩ピルーエット（ハーフピルーエット）は－6～8歩（フルピルーエット）－3～4歩（ハーフピルーエット）で行われるべきである。

8. 収縮常歩での常歩ハーフピルーエット（180度）は、運動を通してコレクションが維持される状態で行われる。ハーフピルーエットの終了時には馬は後肢を交叉させることなく元の蹄跡に戻る。



常歩ハーフピルーエット

9. 常歩からのターン・オン・ザ・ホンチズ

・収縮常歩をまだ見せることのできないヤングホースのために、「ターン・オン・ザ・ホンチズ」が、馬のコレクション準備段階の運動としてある。「ターン・オン・ザ・ホンチズ」は中間常歩からハーフホルトによりステップを少し短縮し、後躯の関節が屈曲する能力を増し準備させる。馬は運動の前後で停止しない。「ターン・オン・ザ・ホンチズ」は常歩ピルエットよりもより大きな半径（約1/2m）で実施することができるが、リズム、コンタクト、活発さおよびストレイトネスに関するトレーニングスケールにおいては同等のものが要求される。

10. 停止から停止までの間のターン・オン・ザ・ホンチズ（180度）

前へ出てゆこうとする動きを維持できるように、旋回の開始時には1歩か2歩の前進が容認される。常歩からのターン・オン・ザ・ホンチズと同じ尺度が適用される。

● パッサージュ

1. パッサージュとは整然とした、極めて収縮し、高揚したケイダンスのある速歩である。特徴としては顕著な後躯のエンゲイジメント、膝や飛節の一層力強い屈伸、優雅なエラスティシティーのある運動があげられる。ケイダンスと長いサスペンションを伴い、各斜対肢は交互に上げ下ろしされる。
2. 原則として、地を離れた前肢の蹄先は、接地している他方の前肢の管の半ばまで引き上げられるべきである。後肢では、地を離れた蹄先が接地している他方の後肢の球節の少し上まで引き上げられるべきである。
3. 頸は起揚して優雅にアーチを描き、項部分が最も高い位置となり、鼻梁のラインは垂直に近いものである。馬はケイダンスを变じることなく、軽くソフトに「オン・ザ・ビット」の状態である。活発で際立ったインパルジョンが維持される。
4. 後肢または前肢のアンイーブンなステップや、前躯または後躯の横揺れ、前肢または後肢のぎくしゃくした動き、浮揚時の後肢の引きずり、あるいはダブルビートは重大な過失である。
5. パッサージュの目的は、速歩での最も高度な収縮、ケイダンスとサスペンションを見せることである。

● ピアッフェ

1. ピアッフェは極めて収縮され、高揚した、その場で行う印象を与えるリズムカルな斜対運動である。馬の背はサブルでエラスティックである。後躯は沈み込む；すなわち飛節が活発に動いて後肢がよくエンゲイジメントし、その結果、肩と前肢の可動性が増し、非常に自由かつ軽快な動きとなる。斜対肢は各々、弾みと整正さをもって交互に上げ下ろしされる。

- 1.1 原則として、地を離れた前肢の蹄先は、接地している他方の前肢の管の半ばまで引き上げられるべきである。後肢では、地を離れた蹄先が接地している他方の後肢の球節の少し上まで引き上げられるべきである。
- 1.2 頸は起揚して優雅にアーチを描き、項部分が最も高い位置となる。馬は軽く、「オン・ザ・ビット」でソフトなコンタクトの状態にあるものとする。馬体は柔軟で調和のとれた物腰を示すべきである。
- 1.3 ピアツフェは馬が真に演技に専心している様を示すべきもので、活発な動きにより常に躍動感があり、完璧なまでにバランスの取れた姿勢を表現していなければならない。その場で運動を行っている印象を与える一方、前進氣勢が認められる場合がある。これは選手からの指示があれば速やかに前進しようとする気構えの現れである。
- 1.4 ほんの僅かであっても後ろへ下がること、前肢または後肢のアンイーブンなぎくしゃくした動き、斜対肢の踏歩が明瞭でないこと、前肢または後肢同士の交叉、前駆や後駆の横揺れ、後肢または前肢が開いてしまうこと、前進し過ぎること、あるいはダブルビートのリズムは重大な過失である。
ピアツフェの目的は、その場に留まっている印象を与えながら最高の収縮度を示すことである。

● インパルジョン／従順性

1. インパルジョンとは意欲的な動きをみせる馬が、後駆で生み出された推進エネルギーを制御して、競技で求められる動きへと転換することである。この究極的なインパルジョンは柔らかくスウィングしている馬の背を通して初めて現れるものであって、選手の拳による穏やかなコンタクトで導かれる。
 - 1.1 スピード、それ自体はインパルジョンとほとんど関係がなく、平坦な歩様となりがちである。インパルジョンはスタッカートのように断音的ではなく、音律的で流れるような歯切れ良い後肢の踏み込みによってはっきり表現される。後肢が地面を離れる瞬間、飛節は上方へ引き上げられるというよりも前方へと振り出されるべきであり、決して後方へ返してはいけない。インパルジョンの決め手は肢が地上に着いている時というよりも、空中期の「間」である。従ってインパルジョンは、空中期のあるペースでのみ現れる。
 - 1.2 インパルジョンは、速歩と駈歩での良好なコレクションを求めるための前提条件である。インパルジョンがなければコレクションはできない。
2. 従順とは隷属ではなく、馬の動作すべてにおける絶え間のない注意力、快諾と信頼によって、また多様な運動を行った場合に示す調和、軽快さ、無理のない動きによって表される従順性を意味する。
従順性の度合いは、軽く軟らかなコンタクトと柔軟な項を保った銜の受け方でも示される。選手の拳に対する抵抗や回避は「銜突き出し（アバウブ・ザ・ビット）」や「ビハインド・ザ・ビット」となって現れ、これは従順性の欠如を示すものである。馬の口との主なコンタクトは水勒銜を通していなければならない。
 - 2.1 舌を出したり、舌を銜の上に乗せたり、あるいは舌を深く巻き込むことは歯ぎしりや尾を激しく動かすのと同様に、ほとんどの場合は馬の神経質さや緊張、抵抗を示しており、審判員は該当する各運動項目と総合観察点でこれを考慮しなければならない。

2.2 従順性を考慮する時に先ず考えなければならないのは意欲であり、即ち馬は求められていることを理解し、選手が出した扶助に対して何の恐れや緊張もなく十分に自信を持って反応している状態である。

2.3 馬にストレイトネスやアップヒル傾向、良いバランスが生まれると、選手の脚による扶助を待てる状態となり、銜を自ら求めて受け入れるようになる。これこそが調和と軽快さを描き出す源である。

馬場馬術課目での主な運動／要求項目を満たすことが、従順性の主たる評価基準である。

● コレクション

1. 馬にコレクション体勢をとらせる目的は：

- ・選手の体重が加わることによって多少なりとも移動してしまう馬体のバランスを改善し、これを一段と高めること。
- ・前肢の可動性と軽快性を有効にするために、後躯の低下と踏み込む能力を発達させ、これを増大させること。
- ・馬の「イーズ・アンド・キャリッジ」に加えることにより、乗ることが一段と楽しくなるような馬にすること。

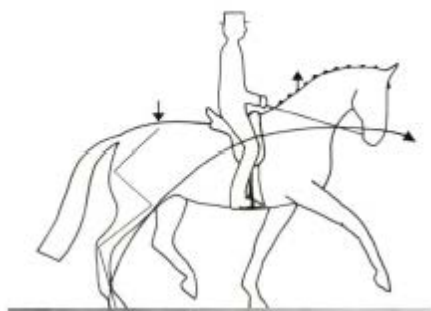
2. コレクションはハーフホルトを使い、また「肩を内へ」、「腰を内へ」、「腰を外へ」、「ハーフパス」といった側方運動を行うことで発達する。

3. コレクションは、シートと脚を使用し、それを拳で受けることによって後肢をエンゲイジメントさせて得られるのであり、また改善できる。諸関節が屈伸して柔軟になり、後肢が馬体下に踏み込む。

4. しかし後肢が余りにも深く馬体下へエンゲイジメントするのは望ましくない。馬体の支持底面が極端に狭くなって動きに支障がでてくる。四肢の支持底面に対して背中のラインが伸びて盛り上がってしまい、安定性が損なわれて馬は均衡のとれた正しいバランスを見つけにくくなるのである。

5. 一方、後肢を自分の馬体下にエンゲイジメントさせようとせず、あるいはできずに支持底面が広くなり過ぎる馬は、「イーズ・アンド・キャリッジ」で特徴づけられるような好ましいコレクションに至ることはなく、後躯の闊達さに由来する活気あるインパルジョンも生み出し得ない。

6. 収縮歩度での馬の頭頸位置は、自然と調教段階に左右されると同時に、ある程度はその体型にも左右される。コレクションが顕著に認められる体勢とは、束縛されることなく頸を起揚させ、髻甲から項にかけて均整のとれたカーブを描き、項は最も高い位置にあって鼻梁は僅かに額からの垂直線より前に出ている状態である。選手が瞬間的にコレクション効果を得るような扶助を使った時には、頭が多少なりとも垂直線上にくるであろう。頸のアーチはまさにコレクションの度合いに直結しているのである。



● 選手の姿勢と扶助

1. すべての運動は、選手の目立った努力が見て取れることなしに、僅かな扶助で行われるべきものである。選手は良いバランスを保ち、しなやかで、鞍の真ん中に深く座り、腰部と臀部で馬の動きを柔らかく吸収し、しなやかな太ももと共に安定して下方に踏み下げられた脚を使う。踵が最も低い位置になければならない。上半身は高く柔らかく保たれなければならない。コンタクトはシートに依存しないものであるべきである。拳は揃えて一定の位置に置かれ、親指が最も高く位置し、柔らかい肘から拳を通して馬の口までが一直線上にある。肘は体へとつけられている。これらの項目を満たすことで、選手が馬の運動にスムーズかつ自由についていくことを可能にさせる。
2. 選手の扶助の有効性が課目で要求されている運動の正確な実施を決定づける。選手と馬の間には常に調和の取れた協調性が見受けられなければならない。
3. FEI馬場馬術競技会では、両手で手綱を持つことが義務づけられている。演技を終え、手綱を伸ばして常歩でアリーナから退場する時には、任意に片手で手綱を取ってもよい。自由演技課目については、「ジャッジへの指針－FEI自由演技課目」と「自由演技課目における難度の判断に関わるガイドライン」も参照のこと。www.fei.orgにて入手可能。
 - 3.1 FEI馬場馬術競技会において、選手は片手で両手綱を持たなければならない停止と敬礼時のほかは両手に手綱を分けて持つことが義務づけられるが、演技が良かった時や安心させるためにそっと馬の頸を「愛撫」することは、（選手が目からハエを払う必要があったり、衣服やサドルパッドなどを整えるなどの状況と同じく）許容できるものである。

しかし課目の演技中に意図的に両手綱を片手にとり、その手綱や空いた手で馬を推進したり、観客に拍手を求めるような行為は過失とみなし、運動項目の点数と総合観察点の双方に反映させる。

自由演技課目については、「ジャッジへの指針－FEI自由演技課目」と「自由演技課目における難度の判断に関わるガイドライン」も参照のこと。

英文版が原本となります。

英文と和文に差異がある場合には、英文が優先されます。

原文はこちらからご確認ください。

